

教育相談課だより No.6

イチローさんが 伝えたこと

日米で活躍した野球選手イチローさんが、3月に引退を発表しました。その後、草野球に参加したり、指導者の研修を受けたりと、何かにつけ話題に上る度に、イチローさんの残した功績の大きさを感ぜざるを得ません。つい最近では、「イチロー杯」の終了が話題になりました。1996年から学童野球の普及を目的に始められた「イ

チロー杯」の終了に当たり、イチローさんから子供たちへの熱いメッセージに、教育について触れられた部分がありました。

「今、みんなは学校で先生にいろいろ教えてもらっていると思うけれども、教える側の立場の人間、先生たちはなかなか難しいらしいです。生徒の方が力関係で強くなっている状況があるようで、僕は心配というか、どうやって教育するんだろうと考えることがあります。中学、高校、大学と社会人になる前に経験する時間、そこで自分自身を自分で鍛えてほしい。厳しく教えることが難しい時代に誰が教育をするのか。最終的には自分で自分を教育しなければいけない時代が来たのだと思います。」

この言葉には、二つのメッセージが込められていると捉えました。

1 「生徒の方が力関係で強くなっている状況がある」

イチローさんは、教師の難しい立場を理解した上で、エールを送っているように感じます。教師と児童生徒との関係性については、様々な考え方があると思いますが、二つの理論をご紹介します。

(1) 「必ずクラスがまとまる教師の成功術！」(野中信行, 横藤雅人共著 学陽書房)より

織物を織る時は、まず「縦糸を張ること」から始める。教育も、この「縦糸を張ること」に始まると考えるのだ。教育の縦糸とは、教師と生徒の上下関係を基礎とする関係づくり(しつけや返事、敬語、ルールなど)である。〈中略〉しかし、縦糸だけでは、織物にならない。そこに横糸、つまり、教師と子供とのフラットな心の通い合いを豊かに絡ませていかなければならない。

(2) 「Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド」(河村茂雄著 図書文化)より

学級が教育力ある集団になるためには、次の2つの要素が、学級内に確立していることが必要条件になる。まず、学級内のルールである。対人関係に関するルール、集団活動・生活をする際のルールが全員に理解され、学級内に定着していることが必要である。ルールが定着していることで、学級内の対人関係のトラブルが減少し、子供たちは傷つけられないという安心感の中で、友人との交流も促進されるのである。もう一つは、リレーションの確立である。リレーションとは互いに構えない、ふれあいのある本音の感情交流がある状態である。学級内の対人関係の中にリレーションがあることで、子ども同士の間に関わり意識が生まれ、集団活動(授業、行事、特別活動)などが協力的に、活発になされるのである。

2 「最終的には自分で自分を教育しなければいけない時代が来たのだ」

この指摘は、文部科学省のいう「自己指導能力の育成」のことでしょう。学習指導要領では、「児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力」と説明しています。教師としては、児童生徒の将来に責任をもって関わる必要があります。

ありがとう
ございます

茨城県教育研修センターの研究発表会において、教育相談課の研究発表は、まさに「自己指導能力の育成」に焦点を当てた発表でした。過去最多の263人の事前申込みをいただき、無事に終了することができました。たくさんのご参加をいただき、有り難うございました。